

治療に役立つ 頭頸部画像診断レポートのポイント

序 説

馬場 亮 *

画像診断技術の発展に伴い、頭頸部領域における画像診断の役割は、病変の検出や質的診断のみならず、治療戦略に寄与する詳細な情報提供へと進化している。頭頸部領域の画像診断は、複雑な解剖に対する理解を要する点、比較的容易に病理生検・診断が可能な病変が多いなどの特徴から、質的診断よりも（臨床的には直接観察できない深部構造への進展を含む）進展範囲評価がより重要である。画像情報はしばしば治療方針に大きな影響を与えるため、画像診断医の役割は重要で、実践的なレポートの作成が求められる。

頭頸部は多岐にわたる解剖学的領域を含んでおり、それぞれに異なる診断アプローチを要する。さらに、これらの部位に発生する疾患は、良性から悪性まで多様であり、疾患ごとに治療戦略が大きく異なるため、画像診断医としては、治療に直結する情報をいかに的確にレポートに反映させるかが重要である。例えば、頭頸部癌の術前評価においては、腫瘍の進展範囲、周囲構造への浸潤やリンパ節転移の有無を詳細に記載することが求められ、さらに、治療方針の決定に影響を与える頸動脈浸潤、神経周囲進展の有無についても言及する必要がある。中耳真珠腫においては、術式決定に影響する乳突腔進展、迷路瘻孔や硬膜露出などの有無に関する治療前評価が、臨床的意義を有する。また、唾液腺腫瘍では、腫瘍の質的診断に加え、顔面神経との関係性の詳細な評価が求められる。これらの

情報は治療前評価には不可欠であり、治療の安全性と根治性の両立に寄与する。

このように頭頸部領域では、病変の存在、進展範囲を評価することに加え、治療方針に寄与する重要な画像所見の理解・記載が望まれる。そこで本特集では、頭頸部画像診断・研究における第一線の先生方に、各領域における代表的疾患について、治療戦略に直結する画像所見を中心に解説していただいた。特に、各疾患における進展形式の特徴、治療前・後評価のポイント、治療に影響を与える画像所見・解剖学的変異などについて、具体的な症例を提示しながら実践的な知識を提供していただいた。さらに、近年の技術革新、最新の画像診断技術がもたらす付加価値についても一部言及していただいた。

日常業務の多忙さや限られた時間の中で、頭頸部画像診断に関する十分な知識を基にした診断を確実に行うことは必ずしも容易ではない。本企画は、画像診断2024年6月号（Vol.44 No.7）特集「治療に役立つ腹部画像診断レポートのポイント」に準じて、“最小限かつ必須の知識”を提供することを目的としている。読者の皆様には、本特集を通じて頭頸部領域の画像診断において求められる実践的な知識を習得し、より臨床に即した、治療方針の決定に寄与するレポートの作成にお役立ていただければ幸いである。

* 東京慈恵会医科大学放射線医学講座

Akira Baba Department of Radiology, The Jikei University School of Medicine